

専門領域を横断する視点

このたび、『現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」』の研究会を発足させた。共同研究員は、「子ども」や「いのち」や「医療」をテーマに研究を行っている。子どもの保健・医療・福祉の仕事に携わっている医療の専門家も参加している。各研究員のこの研究にかかわる研究テーマは次の通りである。子どものグリーフ・ケア（岩本喜久子、札幌医科大学寄附講座緩和医療学）、各国の予防接種制度（神谷元、国立感染症研究所感染症情報センター）、狩猟採集民の子ども（亀井伸孝、愛知県立大学外国語学部）、新生児治療（木村晶子、天使大学大学院助産研究科）、呪術、マリア対策（白川千尋、国立民族学博物館先端人類科学研究部）、人のいのちと死（波平恵美子、お茶の水女子大学名誉教授）、子どものリハビリテーション（榎室伸顕、札幌医科大学大学院医学研究科公衆衛生学講座）、国際保健（プライマリ・ヘルスケア）・在宅看護（藤田美樹、北海道在宅総合ケア事業団）、マス・メディアと子どものいのち（山崎浩司、信州大学医学部保健学科）、離島の子どもと身体観と医療観・エイズ対策（道信良子、札幌医科大学医療人育成センター）。研究の対象地域は、日本を中心とするが、研究員の調査地であるアメリカ、アフリカ、オセアニア、東南アジアも考察の対象に含める。

この共同研究会は、以上紹介したメンバーが人類学、社会学、医学および保健医療分野の専門領域を横断する視点から「子どものいのち」についてさまざまに議論するものである。以下に、このような研究会をなぜ立ち上げたのか、発足の必要性と意義、そして今後の研究の方向性などについて述べる。

「子どものいのち」の認識

子どもは、年齢や性別、生活環境の違いにかかわらず、生きることにおける主体性を持ち、自分のいのちについての情報を発信している。個別社会や文化には、おとなが子どもの状況を理解するための「共通の認識枠組」のようなものが発達しており、昔ながらの養育の方法などに埋め込まれていたと考えられる。しかし、現代社会では、そのような認識枠組は失われているかのように思われる。その背景には、社会を構成する人びとが頻りに自分の社会の外に移動するようになったことや、それとは逆に、その社会に固有のものではない思想や慣習が教育、医療、マス・メディアなどを通じて流布されていることなどがある。こうした状況は、おとなが子どもの発する情報を正しくつかむことを困難にしているのではないかと考える。他方で、異なる思想や文化の影響がなかったとしても、「文化の洗礼」をおとなほど受けていない子どもを理解することは困難である。

保健・医療・福祉の現場に目を向けると、子どもの身体の発達や、病気の理解とそれへの対処方法が、国際基準であるグローバルスタンダードに基づくものになりつつあり、子どもの家族と医療者との間に「子どものいのち」に対する認識のギャッ

プが生まれている。たとえば、予防接種行政に携わる保健医療の専門家は世界保健機関（WHO）の指針に基づいて、各種疾病に関するワクチンの定期接種を積極的に推進している。WHOは、予防接種は子どものいのちを守るために必要不可欠であり、コミュニティ全体を保護する重要な公衆衛生の介入と考える。しかし、子どもが予防接種を受けるかどうかは親の判断にゆだねられているため、受けない場合もある。たとえば接種後の副作用の不安や、その他のさまざまな理由や主観的判断から、子どもへの予防接種を忌避する親がいる（2011年12月4日の共同研究会での討論）。子どもの保健医療政策の作り手と受け手との間にこうした認識のギャップが見られ、保健・医療・福祉の実際やその効果に影響を及ぼしている。

子どものいのちの現場にかかわるすべての人は、子どもが発する情報を確かに受けとめる責務をもつ。その手立てを考えるため、それぞれの認識の違いをひも解き、子どもへのかかわり方とそれを支える前提となるものを省察することが重要である。おとなのものの見方の異なりが原因で、子どもの政策や医療が問題の多いものとなっているとすれば、その問題の糸口を探るには、まずおとなのものの見方を整理する必要があるからである。そして、子どもが生きる世界の中で子どもを理解する方法を探りたい。このような理由からこの研究会を発足し、保健・医療・福祉にかかわるさまざまな現場における「子どものいのち」の実際と、おとなによる認識のギャップを明らかにし、子どもの視点に立って現在の保健・医療・福祉のあり方を見直すことを共同研究の目的とした。

子どもを中心にすえる視点と方法

社会科学からも、医学・医療の領域からも、人のライフサイクルにおける「子ども期」はこれまでにない関心呼び、子どもに関する文献や研究プロジェクトが増えている。しかし、その多くは、おとなによるトップ・ダウンの見方によって、具体的に言うと、人類学では、子どもの成長や発達の様子、「子ども期」が儀礼を通じて社会的・象徴的に作られる様子などが、おとなの目線から考察されてきた。また、出産や誕生に関する研究の多くは、出産・誕生を「子育て」の始まりと捉え、世界各地の子育ての慣習や儀礼を比較するものであった。子ども研究のこうした傾向は、おとなが子どもを社会化する対象として捉え、おとなによる助けが必要であっても自分のいのちを主体的に生きる存在として子どもを見ていないからではないかと思われる。そのため、この研究では、出産・誕生を子どもの「いのち」の始まりと捉える。その学術的意義は、第1に、新生児から思春期までを対象に、子どもたちが発するさまざまなシグナルの意味を読み解く方法を検討することである。

第2の意義は、児童や思春期の子どもに関しては、ことばによる伝達に加えて、日常の遊びや、写真・美術作品などを用いた表現も考察の対象とし、子ども理解の具体的な手法を



写真1 「こんなのできたよ」アートキャラバンで作った作品を8月の空に掲げる (2011年8月、岩手県陸前高田市、岩本喜久子撮影)。

検討することである。亀井伸孝はその著書の中で、狩猟採集民バカの子どもたちが集団で森の虫を捕り、森の素材でおもちゃを作るなど、子どもの遊ぶ能力が森の素材と結びついて具体的な活動となっている様子を生き生きと描き出している(亀井2009)。また、岩本喜久子は、東日本大震災の被災地でアートキャラバン(日本の非政府組織ピースウィンズ・ジャパン <PWJ> が行っている子ども支援の活動)に参加し、避難所や仮設住宅などで暮らす子どもたちの作品作りを手伝った。その作品には、子どもたちの将来に向けた創造力や、震災を契機として確認された家族への思いなどが表現されており、子どもたちの経験は苦悩や悲嘆ばかりではないことがうかがえる(写真1, 2参照)。以上述べたことから、共同研究の成果を公開する際に、子どもにとっても価値のある表象手段を選び、ことばに偏らず、写真や絵による公表も可能だと考えている。

今後の研究の方向性—共通の認識枠組を探る

より発展的な目標として、この共同研究では「子どものいのち」を考える上での基本的価値や共通の認識枠組を探り、保健・医療・福祉の現場における課題に具体的に対応するための方法を提示したいと考えている。

一般に、医学・医療と社会科学とは「いのち」に対する

異なる考え方や捉え方をもっていると次のように説明される。医学・医療では、いのちを個人の身体の構造や機能に位置づけて考えるが、社会科学では、いのちを社会環境や自然環境の中に位置づけて捉えようとする。そのため、各学問領域における「いのち」「身体」「社会/自然」



写真2 「おっぴちゃん、おじいちゃん、お父さん…」家族への思いを作品を通して表現する (2011年5月、宮城県気仙沼市、岩本喜久子撮影)。

の関係性についての異なった見方によって、人のいのちへの介入の仕方も異なってくる。

しかし、こうした説明は、医学・医療や社会科学の研究・実践をそれぞれの専門領域の固定された枠の中に縛るものである。人類学においても身体の構造や機能に関する考察は重要であるし、医学・医療においても人のいのちの全体を見ようとする視点は少なからずある。たとえば榎室伸顕は、子どもの生活全体を視野に入れて身体機能を促す理学療法に取り組んでいる。子どもの住まい、家族、親の収入や子どもに対するところの状態にも配慮し、子どもが障がいをもって生きることの具体を理解しようとしている。また、リハビリを受ける子ども同士の相互関係にも着目している。写真3は、ひとりで座ることが困難な男児を手押し車に固定し、おとなが押して遊ばせていたところ、他者とのかわりが極端に少なかった同年齢の女児がみず

からその車を押して一緒に遊んでいる様子である。子どもが互いのところを開き、自然な遊びの中でトレーニングができていた様子を表している。

こうした例が示すように、子どもの生きる営みは既存の専門領域が提示する枠組を超えていると考え、この学際研究を立ち上げた。そのため、共同研究では、医学・医療と社会科学の多様な視点をふましつつ、互いの対話を進め、個々の実践の現場における子どものいのちの具体をていねいに理解することから始める。学問の多様な論理と子どものいのちの実際は、どこでどのように折り合わされて、ひとつの全体的な説明を可能とするのか。共同研究が取り組もうとしている理論的な課題である。



写真3 自然な遊びから生まれる子どもたちのリハビリ (2001年9月、小樽市、榎室伸顕撮影)。

【参考文献】

亀井伸孝編 2009 『遊びの人類学—はじめ—フィールドで出会った〈子どもたち〉』 昭和堂。

みちのぶ りょうこ

札幌医科大学准教授。専門は医療人類学。著書に、「健康・病気・医療」『文化人類学』(波平恵美子編 医学書院 2011年)、『現代タイの社会的排除—教育、医療、社会参加の機会を求めて』(共編著 梓出版社 2010年)、『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして』(共著 医学書院 2005年)、論文に“HIV is irrelevant to our company”: Everyday practices and the logic of relationships in HIV/AIDS management by Japanese multinational corporations in northern Thailand (Social Science & Medicine 68(5), 2009) など。